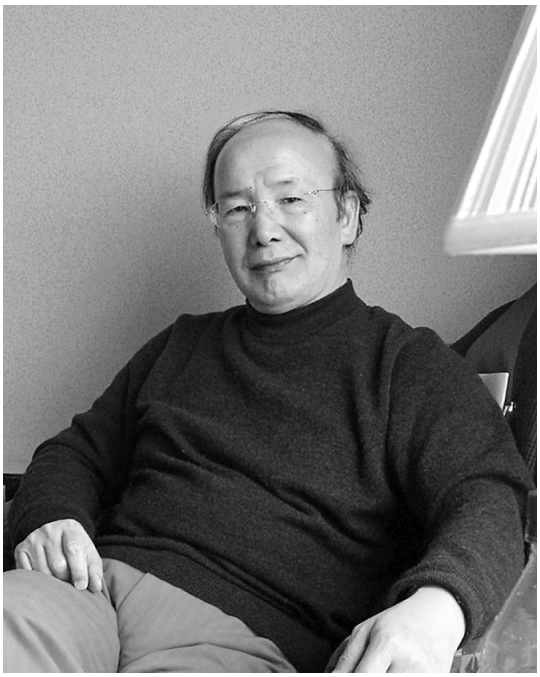
追悼特集

服部民夫先生を偲んで



服部民夫先生の訃報に接し、人の世の無常を感じざるをえない。問わず語りに、「私の胸にはペースメーカーが入っているんです」などと言っていたが、健康に自信がないようにも見えなかった。還暦のお祝いに駆けつけたときには、お元気そのものであった。それから数ヵ月後に倒れ、長い闘病生活に入られるとは、無常の極みである。

私も経験したことだが、還暦という区切りを迎えて、服部先生は自分の人生を再設計されていたはずである。誰もが「定年退職までに何を終え、その後は……」と考えるはずだが、学者らしい学者だった服部先生のことだから、その大半は学問的な研究計画だったに違いない。どのような優先順位で、何をやりたかったのか、とても興味深いことだが、いまとなっては確認のしようもない。ただ、その無念を拝察するのみである。

学者同士の結びつきについて回想する。

ここからは「服部さん」にさせていただくが、服部さんと私の学問的な交流の出発点はアジア経済研究所の「韓国の工業化」プロジェクトであった。その当時、すなわち1980年代中頃、アジ研では地域別の工業化研究プロジェクトが組まれていた。服部さんが韓国部門の責任者に抜擢され、なぜか私に声を掛けてくれたのである。

政治経済学的な観点からにしても、韓国の工業化についての研究を依頼されるのは、私には意外なことであった。冷戦史、とくに朝鮮戦争を研究テーマにしていたし、北朝鮮研究にも手を染めていたが、韓国の工業化は射程外だったからである。

しかし、韓国留学中に十月維新を体験した者として、いつかは取り組まなければならないテーマだったので、思い切って引き受けることにした。案の定、他分野の先生方、とりわけプロジェクトを的確にリードする服部さんとの対話が、とても

楽しく、有益であった。

2年間のプロジェクトであり、その成果は「アジア工業化シリーズ」第2巻『韓国の工業化・発展の構図』（アジア経済研究所、昭和62年）として結実した。私は自分の担当する部分を「工業化の政治力学」と題して朴正熙のクーデター、日韓国交正常化、ベトナム派兵そして維新体制と関連づけて執筆し、責任を果たしたつもりでいた。

しかし、校正段階で、服部さんから電話があった。正確には覚えていないが、「原稿の最後の部分に何行か付け加えてもよいか」という趣旨であった。もちろん、遠慮がちの申し出ではあったが、私は即座にOKを出した。「失礼なことを言うなぁ」という気持ちもないではなかったが、それ以上に、服部さんが何を付け加えたいのかが興味津々だったからである。

さすがに広い視野をもつ専門家であった。関心のある方には当該部分を参照していただきたいが、私が論じた朴正熙時代の工業化の特徴を韓国の工業化全体のなかにピタッと位置づけてみせたのである。わずか数行で、論文全体が引き締まっていた。

たいそう気に入った数行だったので、これまで、私はその部分が「服部作」であることを口外したことがなかった。追悼の意味を込めて、改めて申し上げよう。服部さん、ありがとう。

（小此木政夫　慶應義塾大学名誉教授）

還暦のお祝いをした5ヶ月後の2007年12月、服部民夫先生は、東大病院で手術を受けられた直後に脳梗塞を起こし、その後、長い闘病生活に入られた。一時は意識もしっかりしておられ、言葉こそ発せなかったものの、目の動きと、首を回したりうなずいたりすることで、お気持ちやご意思を伝えることができた。

服部先生が何事もなかったかのようにすっと立ち上がって、満面の笑顔でお話されるお姿を、何度、夢で見たかわからない。しかし、残念ながらそれが現実になることはなかった。二度目の脳梗塞により、服部先生は寝たきりになられ、意思疎通も困難になってしまった。

奥様の雅子さんの献身的な手厚い看護を受けながら、服部先生は約7年半、ご自宅で静かに過ごされた。そして2015年8月5日、永遠の眠りにつかれた。お棺の中の服部先生は、お気に入りだったカーキ色のスーツを着て、ネクタイを締めていらした。凛としたお姿だった。そして、とても安らかなお顔をされていた。

享年68歳。あまりに早すぎるお別れであったが、何よりも服部先生の無念さを思うと、胸が張り裂けそうになる。服部先生は「たいした手術じゃないからすぐ退院するよ」とおっしゃり、鞄に院生の博士論文や研究資料をはちきれんばかりに詰め込んで、入院された。その翌日の手術で、服部先生の長年にわたる研究生活は、突如断ち切られてしまった。

服部先生はいつも多くの研究プロジェクトに関わっていらしたが、いつお会いしても新しい研究計画について楽しそうにお話されていた。研究の幅が広いだけでなく、研究が心底お好きで、新しい分野を開拓する意欲に燃えていらした。本当に無念であったであろう。

服部先生はアジア経済研究所(アジ研)で研究生活を始められ、「組立型工業化論」や「財閥論」など独自の議論を構築された。東京経済大学に移られてからも、引き続きアジ研を大きな拠点としながら、当時の若手研究者と一緒に「韓国－ネットワークと政治文化」の草稿などを検討する方法論研究会、ウエーバーやアダム・スミスの読書会、「韓国と台湾の発展メカニズム」研究会などを開いていらしたという。

同志社大学に移られてからは、「朝鮮半島フォーラム」という研究会を立ち上げ、関西地方を拠点とした研究活動にも情熱を傾けていらした。

服部先生は、領域横断的な優れた研究業績を次々に上げられながら、東京経済大学、同志社大学、東京大学で教鞭をとり、若手の指導にもたいへん熱心だった。奥様の雅子さんは、「あの人はね。若い人が大好きなのよ」といつもおっしゃっていた。

服部先生は、直弟子だけでなく、服部先生を慕う他学部や他大学の院生、多様な学問領域の研究者たちにいつも囲まれていた。若手が学会報告を

する際には、事前に発表レジメを細かく読み込んで、助言をメモ書きにして、最前列で熱心に聴いていらした。厳しいコメントをされることもあったが、後進の成長と研究の発展のため、常に真摯に向き合っていらした。若手の研究者や研究者の卵たちを服部先生はたいへん慈しみ、ご自分の研究時間を割いて話を聞き、助力を惜しまなかった。

人間の短い一生の中で、出会える「縁」は限られている。服部先生と同時代に生き、ご指導を受け、深いご縁をいただいた私はとても幸せであった。服部先生の存在はあまりに大きい。これからも私の心の中で、服部先生はいつまでも元気なお姿のまま生き続け、永遠に消えることはないであろう。

敬愛する服部先生のご冥福を、心よりお祈りいたします。

（春木育美　東洋英和女学院大学）

故 服部民夫先生　略歴

1947 年	大阪府生まれ
1971 年	同志社大学文学部社会学科卒業
	同年 アジア経済研究所入所
	（在職時、ソウル大学、ハーバード大学で客員研究員)
1991 年	東京経済大学経営学部　教授
1996 年	同志社大学文学部社会学科　教授
2002 年	東京大学大学院人文社会系研究科　教授
2012 年	東京大学　名誉教授
2015 年 8 月 5 日	逝去

（主要著作）

『韓国の企業――人と経営』（大道康則と共著）日本経済新聞社、1985 年。
『韓国の工業化――発展の構図』（編著）アジア経済研究所、1986 年。
『韓国の経営発展』（単著）文眞堂、1988 年。
『韓国――ネットワークと政治文化』（単著）東京大学出版会、1992 年。
『韓国・台湾の発展メカニズム』（佐藤幸人と共編）アジア経済研究所、1996 年。
『韓国経済の解剖――先進国移行論は正しかったのか』（松本厚治と共編）文眞堂、2001 年。
『アジア中間層の生成と特質』（鳥居高、船津鶴代と共編）日本貿易振興会アジア経済研究所、2002 年。
『日本型資本主義――どうなるどうする戦略と組織と人材』（宮本又郎などと共著）有斐閣、2003 年。
『韓国社会と日本社会の変容――市民・市民運動・環境』（金文朝と共編）慶應義塾大学出版会、2005 年。
『開発の経済社会学――韓国の経済発展と社会変容』（単著）文眞堂、2005 年。
『日韓政治社会の比較分析』（張達重と共編）慶應義塾大学出版会、2006 年。
『東アジア経済の発展と日本――組立型工業化と貿易関係』（単著）東京大学出版会、2007 年。

以上。

（作成・安倍　誠　アジア経済研究所）